

川崎市政ニュース映画ナレーションにおける脱文脈化程度の検討

田中 弥生

神奈川大学・国立国語研究所

春木 良且

フェリス女学院大学

1 はじめに

われわれの発話には様々な表現がある。桜を見て「この桜は綺麗だね」と言うこともあれば、「私は桜が好きです」、「花というのは綺麗なものです」、「桜はバラ科の植物だ」などとも言える。修辞ユニット分析の分類法を用いて脱文脈化の観点からこれらの表現の違いを説明することができる。本発表は、ニュース映画のナレーションの分析を試みる。

ニュース映画とは、映画館で上映前などに流されていたニュース映像である。テレビが普及するまで、映画は大衆娯楽の代表的なメディアであり、一般大衆に訴求力の高いメディアであった。その本編上映前などにニュース映画が流され、人々にとって貴重な情報源であったとされる。戦後、主に復興の記録として製作された中で、各自治体によって地域の広報としてつくられたものは、「政策ニュース映画」と総称されている。川崎市政ニュース映画は、主に川崎市の政策内容を説明するもので、昭和27年から平成19年までの地域の行政施策の記録でもある。筆者らはこれまで、ニュース映画の頻出語分析から、昭和20、30年代は工業的な「発展」の時代であり、平成は「交流」の時代であることを明らかにし(春木ほか2017:248)、ニュース映画における「こども」に関わる表現のうち「良い子」と(良いつかない)「子供」の出現頻度や共起する語の比較から、行政活動における子供の捉え方を明らかにするとともに、政策ニュースにおける語彙分析の可能性を示した(春木・田中2018)。

修辞ユニット分析は、選択体系機能言語理論の枠組みでCloran(1995,1999)によって提案された英語の分析手法で、佐野(2010a)、佐野・小磯(2011)によって日本語に適用されている。英語の母子会話における家庭の社会経済状況と修辞機能及び脱文脈化の分析(Cloran1995,1999)や、専門性の観点からの日本語作文指導にこの概念を活用する方法の説明(佐野2010b)がなされ、また、筆者らは、Yahoo!知恵袋のQA投稿や、児童作文、チラシ、子供会話など様々な談話やテキストについて脱文脈化の観点からの検討を行なっ

た(田中2012,2018a,2018b,田中・小磯2019,田中・佐野2011)。

修辞ユニット分析では、主語などの分類によって修辞機能と脱文脈化指数を特定して修辞ユニットの様相を確認する。市政ニュース映画ナレーションの脱文脈化の観点からの分析は、時代やテーマによる違いの有無、使用されている語彙との関連などから、これまでにないニュース映画の言語表現の特徴を示せる可能性がある。しかし、ニュース映画のナレーションは、その映画の聴衆の居る場所で聞こえるが、録音は過去に行われており、発信者と受信者が同じ時空にいるわけではない。また、市政ニュース映画の場合、原稿を読んでいると考えられ、発話の主体はナレーター自身とは限らない。そのため、元々母子対面会話の分析に用いられた修辞ユニット分析の分類法をニュース映画のナレーションに適用する際には、認定において困難な点がある。本発表では、中核要素の認定に関わる具体例を取り上げて検討した上で、ニュース映画のナレーションという談話において、どのように脱文脈化を捉えられるかを検討する。本研究によって、修辞ユニット分析分類法の対面会話以外の談話における「状況」の捉え方の確認することで、さらに様々な談話への適用や将来的な機械処理に向けた検討を進めることにつながると考える。

2 データと分析方法

2.1 データ

本発表では、昭和20、30年代と平成00、10年代の川崎市政ニュース映画のうち、タイトルに「子供」「子」を含む22件のナレーション書き起こしを分析対象とする。

2.2 分析方法

修辞ユニット分析では、テキストを分析単位(メッセージ)に分割し、分析対象となるメッセージについて、発話機能(提言、命題)、中核要素(状況内、状況外、定言)、現象定位(過去、現在、未来、仮定)を認定し、その交差から修辞機能と脱文脈化指数を特定する。ここでは手順の概要を示す。詳細は佐野(2010a,2010b)、

佐野・小磯 (2011) を参照されたい、

2.2.1 分析単位

分析単位 (メッセージ) は概ね節に相当するが連体修飾節は独立したメッセージとして扱わない。以下の4種類に分類する。「位置付け」は相槌や定型句、挨拶、「生活に潤いを与えてくれる河川」のような述部がなく復元もできないもので、分析対象としない。「拘束；意味的従属」は従属節のうち「物の大切さを知ってもらおうと」や「お母さんたちと保健婦さんを交えて」のような目的や付帯状況、理由、時間や場所などを表しているもので、単独では分析しない。それ以外の従属節は「拘束；形式的従属」で、主節の「自由」とともに分析対象となる。

2.2.2 発話機能

種類が「拘束；形式的従属」及び「自由」と認定されたメッセージは、発話機能を「提言」か「命題」に分類する。「提言」は品物・行為の交換に関する提供・命令などのメッセージで、基本的には同じ場、同じ文脈に存在する会話者に品物や行為を要求・提供する表現が該当し、修辞機能「行動」脱文脈化指数 [1] と特定される。「命題」は情報を交換する陳述・質問などのメッセージが該当し、中核要素と現象定位を認定する。

2.2.3 中核要素

中核要素はメッセージの中心となる要素で、発信者と表現されているものの間の空間的距離を示す。基本的に主語によって表現され、「状況内」「状況外」「定言」に分類する。省略されている場合には復元して認定する。「状況内」は、中核要素がメッセージの送り手や受け手のいる場に存在する人や事象で、下位分類として伝達当事者である送り手・受け手は「状況内；参加」、当事者でない人や事象は「状況内；非参加」に分類する。「状況外」はその場以外にいる人や事象の場合で、「定言」は何らかの事象の普遍的な性質を述べているメッセージの主語が該当する。

2.2.4 現象定位

現象定位はメッセージが伝達される時間を基準として、メッセージで表現されている出来事がいつ起こったかを示す要素で、基本的にテンスや時間を表す副詞などによって表現され「現在」「過去」「未来」「仮定」に分類する。メッセージの内容がすでに起こった出来事であれば「過去」、その時に起こっていることであれば「現在」となる。「現在」のうち一時的な事象であれば「現在；非習慣的・一時的」で、普遍的なことや習慣的な事象の場合には「現在；習慣的・恒久」に分類する。これから起こる事象は「未来」で、意図を持つ

表 1: 発話機能・中核要素・現象定位からの修辞機能と脱文脈化指数

		発話機能									
		命題									
		現象定位									
		現在					未来				
中核要素		状況内	参加	[1] 行動	[2] 実況	[7] 自己記述	[3] 状況内回想	[4] 計画	[5] 状況内予想	[6] 状況内推測	仮定
			非参加	n/a	[8] 観測	[10] 状況外回想	[11] 予測	[12] 推量			
		状況外	報告	[9] 報告	[13] 説明	[10] 状況外回想	[11] 予測	[12] 推量			
			定言	n/a	[14] 一般化	[10] 状況外回想	[11] 予測	[12] 推量			



図 1: 脱文脈化指数

て実行できるか否かによって「未来；意図的」か「未来；非意図的」に分類する。なんらかの条件のもとで出来事が起こる場合には「仮定」となる。

2.2.5 修辞機能と脱文脈化指数の確認

表 1 に、修辞機能を特定するための中核要素・発話機能・現象定位の組み合わせを示す。表内の数字は脱文脈化指数で、図 1 のようにその談話の場にもっとも近い (脱文脈化指数が低い) ものから、その談話の場からもっとも遠い (脱文脈化指数が高い) ものまで配置されている。

脱文脈化指数は、発話が行われている場とそのメッセージ内容の空間的・時間的距離を示す。「あの桜をとって」と相手に指示するその場面にいる相手への命令や指示は上述の分類では発話機能が「提言」、修辞機能は「行動」脱文脈化指数は最も低い [1] である。また、例えば「弘前公園の桜祭りが先週始まった。」という情報提供メッセージの主語は「弘前公園の桜祭り」で、弘前公園以外で発信された場合、中核要素は「状況外」、述部のテンスが「先週始まった。」であることから現象定位は「過去」となり、修辞機能「状況外回想」脱文脈化指数 [10] である。また、「桜はバラ科に属する。」のような一般的に定まっている事象は、中核要素が「定言」現象定位が「現在；習慣的・恒久」で修

辞機能は「一般化」脱文脈化指数 [14] と最も高い⁽¹⁾。

3 分析と考察

例として施設を紹介する昭和 20 年代のナレーション (1) を検討する。冒頭の a でろう学校の存在を紹介し、b で現在の児童数、c から f では教育の方法、g では子供の様子が紹介されている。

- (1) a. 耳が聞こえない不幸な子供達を教育する、川崎市立ろう学校は昭和 26 年に誕生して、
 b. 今では学童も 40 名になっていますが、
 c. 先生の●●にも及ばぬ努力で、子供達は楽しく勉強に励んでいます。
 d. この学校は、今までの指の形で話し合う指話法をやめて、
 e. 口の動かし方を見て話を聞き語る読話法の教育を行い、
 f. 一般の学校に負けない勉強が行われています。
 g. また、太鼓の響きは皮膚に感じるところから、太鼓の音で調子を取りながら、音楽を演奏することもできます。

中核要素は、発信者がろう学校の当事者であると考えられるか、川崎市側の立場ではあるがろう学校の当事者とは考えないか、市とは関係ない立場と考えるかによって認定が異なる。表 2 に当事者と考えて分類した結果⁽²⁾を、また、表 3 に市側の立場でないと考えて分類した結果を示す。なお、発信者を川崎市側の立場の人間だがろう学校の当事者ではないと考えた場合は a と d と e の中核要素が「状況内；参加」から「状況内；非参加」になり、その結果 e が「自己記述」[7] から「観測」[8] に変わるが、a と d の修辞機能と脱文脈化指数は変わらない。

表 2: 認定例：ナレーターを当事者と考える

中核要素	現象定位	修辞機能 [脱文脈化指数]
a 川崎市立ろう学校は (状況内；参加)	昭和 26 年に誕生して (過去)	状況内回想 [3]
b 学童も (状況内；非参加)	今では なっていますが (現在；一時的・非習慣)	実況 [2]
c 子供達は (状況内；非参加)	励んでいます。 (現在；習慣的・恒久)	観測 [8]
d この学校は、 (状況内；参加)	指話法をやめて、 (過去)	状況内回想 [3]
e (φ = この学校は) (状況内；参加)	読話法の教育を行い、 (現在；習慣的・恒久)	自己記述 [7]
f 勉強が (状況内；非参加)	行われています。 (現在；習慣的・恒久)	観測 [8]
g (φ = 子供達は) (状況内；非参加)	演奏することもできます (現在；習慣的・恒久)	観測 [8]

⁽¹⁾以下、修辞機能は「」で脱文脈化指数は [] で示す。

⁽²⁾d は「この」という自分に近いものをさす指示語があるので「私たちの学校は」と読み替えた。

表 3: 認定例：ナレーターを川崎市側の立場と考えない

中核要素	現象定位	修辞機能 [脱文脈化指数]
a 川崎市立ろう学校は (状況外)	昭和 26 年に誕生して (過去)	状況外回想 [10]
b 学童も (状況外)	今では なっていますが (現在；一時的・非習慣)	報告 [10]
c 子供達は (状況外)	励んでいます。 (現在；習慣的・恒久)	説明 [13]
d この学校は、 (状況外)	指話法をやめて、 (過去)	状況外回想 [10]
e (=この学校は) (状況外)	読話法の教育を行い、 (現在；習慣的・恒久)	説明 [13]
f 勉強が (状況外)	行われています。 (現在；習慣的・恒久)	説明 [13]
g (φ = 子供達は) (状況外)	演奏することもできます (現在；習慣的・恒久)	説明 [13]

発信者をニュース映画の市側の立場と考えない場合、表 4 のように表 3 よりも脱文脈化指数が高くなり、反対に発信当事者と捉えると、脱文脈化指数は低くなる。このように、川崎市側の立場の中で当事者か否かは大きな脱文脈化程度の変化にはつながらないが、発信者が川崎市側の立場か否かでは修辞機能と脱文脈化指数は大きく変化することがうかがえる。対面会話以外の談話について修辞ユニット分析の分類手法を用いて分析する場合には、中核要素の「状況」の捉え方に検討が必要になることがわかる。

次に (2) は昭和 20 年代のイベントを報告するニュース映画のナレーション、(3) は、平成 10 年代のイベントの報告である。各メッセージの後ろに【ナレーション発信者をイベント主催当事者と考える場合の「修辞機能」[脱文脈化指数] → 川崎市側立場でない場合の「修辞機能」[脱文脈化指数]】を示す⁽³⁾。

- (2) a. 5月5日はこどもの日。【「一般化」[14] → 「一般化」[14]】
 b. 今年はうららかに晴れた五月晴れにこのぼりの数もぐんと増え、【「状況内回想」[3] → 「状況外回想」[10]】
 c. 子供たちを中心の催し物が至る所に見られました。【「状況内回想」[3] → 「状況外回想」[10]】
 d. この日、川崎市では、家庭に恵まれない孤児たちにもこの喜びを与えようと、市長さんがたくさんのおみやげを持って孤児院を訪れ【「状況内回想」[3] → 「状況外回想」[10]】
 e. 不幸な子供たちを喜ばせました。【「状況内回想」[3] → 「状況外回想」[10]】
 f. また、ある孤児院の子供たちは市長室に招かれ、【「状況内回想」[3] → 「状況外回想」[10]】
 g. 市長さんから激励の言葉を受けましたが、【「状況内回想」[3] → 「状況外回想」[10]】

⁽³⁾変化のないものを太字で示した

- h. 食べ盛りの子供たちを最も感激させたのは、美味しいごちそうのようでした。【「状況内回想」[3] → 「状況外回想」[10]】
- (3) a. 親子の声が大きくなうねりとなって多くの人々を動かし、【「状況外回想」[10] → 「状況外回想」[10]】
- b. 初めてのイベント「かわさき区子育てフェスタ」を開催。【「状況内回想」[3]「状況外回想」[10]】
- c. これは、1月の末から1週間、川崎区内の保育園や保健所などを利用して行われたもので、【「状況内回想」[3] → 「状況外回想」[10]】
- d. 1月31日には、教育文化会館で合同イベントも。【「状況内回想」[3] → 「状況外回想」[10]】
- e. 子育て中の人はもちろん、これから子育てをする人、子育てを終わった人たちが、大勢参加しました。【「状況内回想」[3] → 「状況外回想」[10]】
- f. 日ごろ抱えている子育ての悩みなどの相談や、親子が楽しめるコーナーが用意されました。「状況内回想」[3] → 「状況外回想」[10]】
- g. 子供たち同士がふれ合うパネルシアター、そして、保育園の先生による読み聞かせでは、楽しい話に聞き入っていました。「状況内回想」[3] → 「状況外回想」[10]】
- h. こちらは人気が集まった手作りおもちゃのコーナー。【「実況」[2] → 「報告」[9]】
- i. 紙のコップや皿などを利用して、お母さんと共同制作。【「観測」[8] → 「報告」[13]】
- j. 次の時代を担う子供たちは、みんなの宝物。【「一般化」[14] → 「一般化」[14]】
- k. だから、川崎市では、子育て中の家庭を地域でサポートしています。【「自己記述」[7] → 「報告」[13]】
- l. お近くの保育園、保健所にお尋ねください。【「行動」[1] → 「行動」[1]】

発信者を当事者と考える場合（状況内）と考えない場合（状況外）で全体的に脱文脈化の程度が変わるが、いくつか変化していないものがある。(2)a及び(3)jの「一般化」[14]は当事者に関係なく、変化しない内容である。(3)aの「状況外回想」[10]は開催されているイベントに川崎市側の立場の発信者がいる場でもそうでない場でも、「うねりとなった声」を発した親子は「状況外」と認定されるため変わらない。また、(3)lは相手に行為を働きかける内容のため、発話機能が「提言」となり、「行動」[1]となる。本来「提言」は同じ場で交わされるやりとりであるが、このような同じ場に存在していない場合にも認定できることがわかる。

4 まとめと今後の課題

本発表では、川崎市政ニュース映画のナレーションを対象に、修辞ユニット分析の分類法による脱文脈化程

度の検討を行なった。対面の談話ではない録音されたナレーションにおいては、発信者と状況の捉え方によって特定される修辞機能と脱文脈化指数が異なることを確認した。川崎市側の発信当事者として捉える場合には全体的に脱文脈化指数が低くなるが、普遍的なことは変化することなく脱文脈化指数が高く、行動を即す表現も変化することなく脱文脈化指数が低いこともあきらかになった。修辞ユニット分析の分類法を用いる際には、まずコンテキストや当事者の捉え方を明確にすることが必要であることがわかった。本発表では一部のデータのみ示し、市政ニュース映画の特徴の分析は稿を改める。さらに分析の数を増やし、時代やテーマによる修辞機能や脱文脈化指数の用いられ方の特徴の有無を明らかにすることを、今後の課題とする。

謝辞 本研究は、JSPS 科研費 JP18KT0035, JP19K00588, JP19K12724 の助成を受けたものです。

参考文献

- Cloran, C. (1995) Defining and Relating Text Segments: Subject and Theme in Discourse, In R. Hasan and P. Fries (eds) *On Subject and Theme: From a Discourse Functional Perspective*. Amsterdam: Benjamins.
- Cloran, C. (1999) Contexts for learning. In Christie, F. (ed.) *Pedagogy and the Shaping of Consciousness*, London: Cassell, pp. 31–65.
- 佐野 (2010a) 「日本語における修辞ユニット分析の方法と手順 ver.0.1.1-選択体系機能言 語理論 (システムック理論) における談話分析-(修辞機能編)」 <https://researchmap.jp/kotonoha/> (RUA の方法と手順 ver.0.1.1) 2020/1/11 閲覧
- 佐野 (2010b) 「選択体系機能言語理論を基底とする 特定目的のための作文指導方法について —修辞ユニットの概念から見たテキストの専門性—」 *専門日本語教育研究*, 12, pp. 19–26.
- 佐野・小磯 (2011) 「現代日本語書き言葉における修辞ユニット分析の適用性の検証 —「書き言葉らしさ・話し言葉らしさ」と脱文脈化言語・文脈化言語の関係—」 *機能言語学研究*, 6, pp. 59–81.
- 田中 (2018a) 「児童・生徒作文の日本語修辞ユニット分析と教員評価の検討」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』3, pp. 91–104.
- 田中 (2018b) 「日本語非母語話者向け自治会加入勧誘チラシとその作成振り返りコメントの分析：修辞機能と脱文脈化程度の観点から」『言語情報科学』16, pp. 73–88.
- 田中・小磯 (2019) 「家庭での幼児の発話の修辞機能—脱文脈化の観点からの検討—」『言語資源活用ワークショップ 2019 発表論文集』 pp. 106–118.
- 田中・佐野 (2011) 「Yahoo!知恵袋における質問の修辞ユニット分析：脱文脈化-文脈化の程度による分類」『信学技報』110(400), pp. 13–18.
- 春木・田中 (2018) 「「よい子」って誰? : 政策ニュース映画のナレーション表現に関する研究の一環として」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』3, pp. 348–361.
- 春木・田中・田村 (2017) 「川崎市政ニュース映画のナレーション分析を用いた映像理解の試み：市民アーカイブズ構築のための枠組みとして」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』2, pp. 239–251.